

エロエロ

エロエロ



DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止





藤堂ユリカ

スターライト学園の高等部に所属するクール系のゴスロリアイドル。人間と吸血鬼の間に生まれた混血の吸血鬼(タンピール)。推定600歳で、永遠の刻を共に旅してくれる下僕を探している。らしい。その強烈なギャラクターとロリゴシックのコーデを身に纏い舞うステージに魅了されるファンも少なく、カルト的な人気を誇る。元トップアイドル「神崎美月」とユニットを組んだ経歴もあり。その実力は折り紙つきである。そのような、気高く美しい彼女を汚す魔の手が迫っていようとは、誰が予想出来たであろうか…



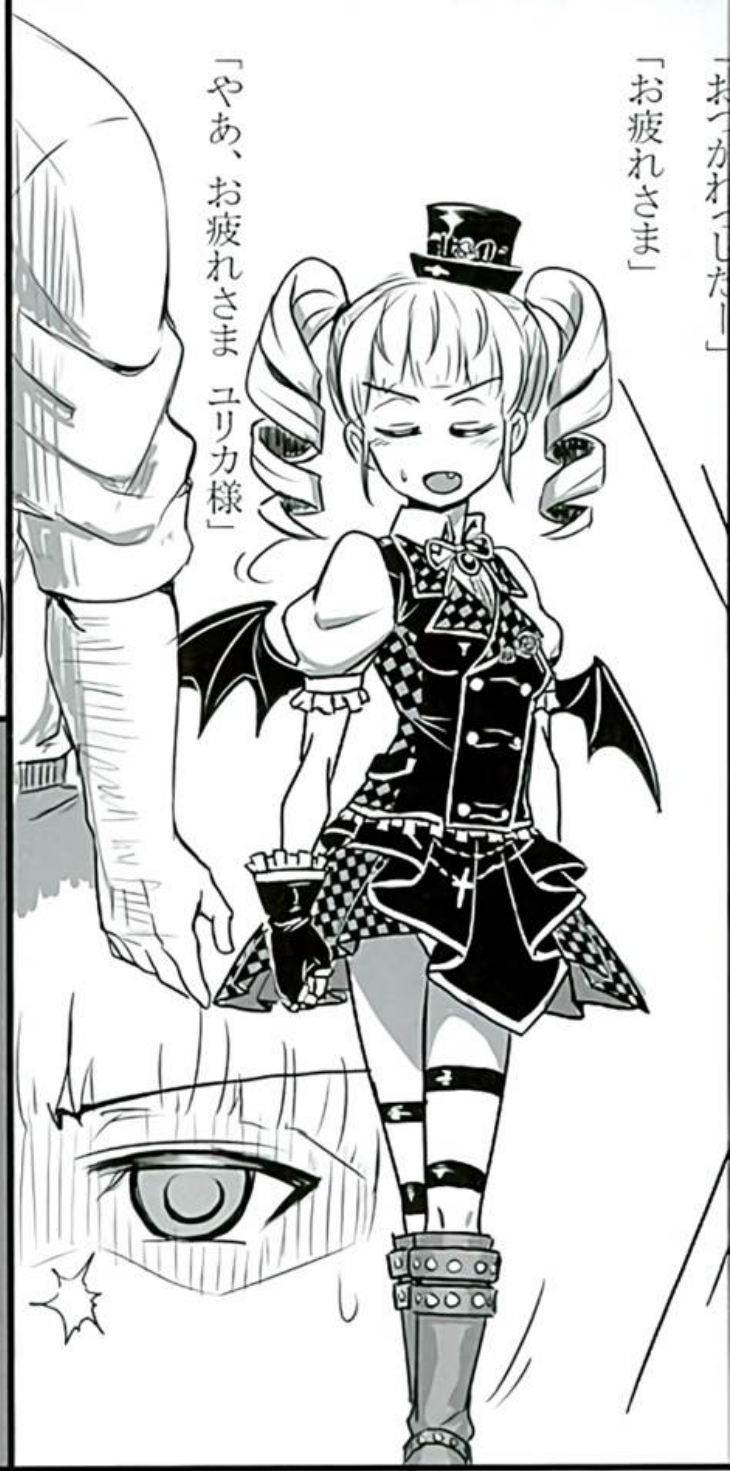
!?

「でこの後…いいかな」

「とてもいいステージだったよ。」

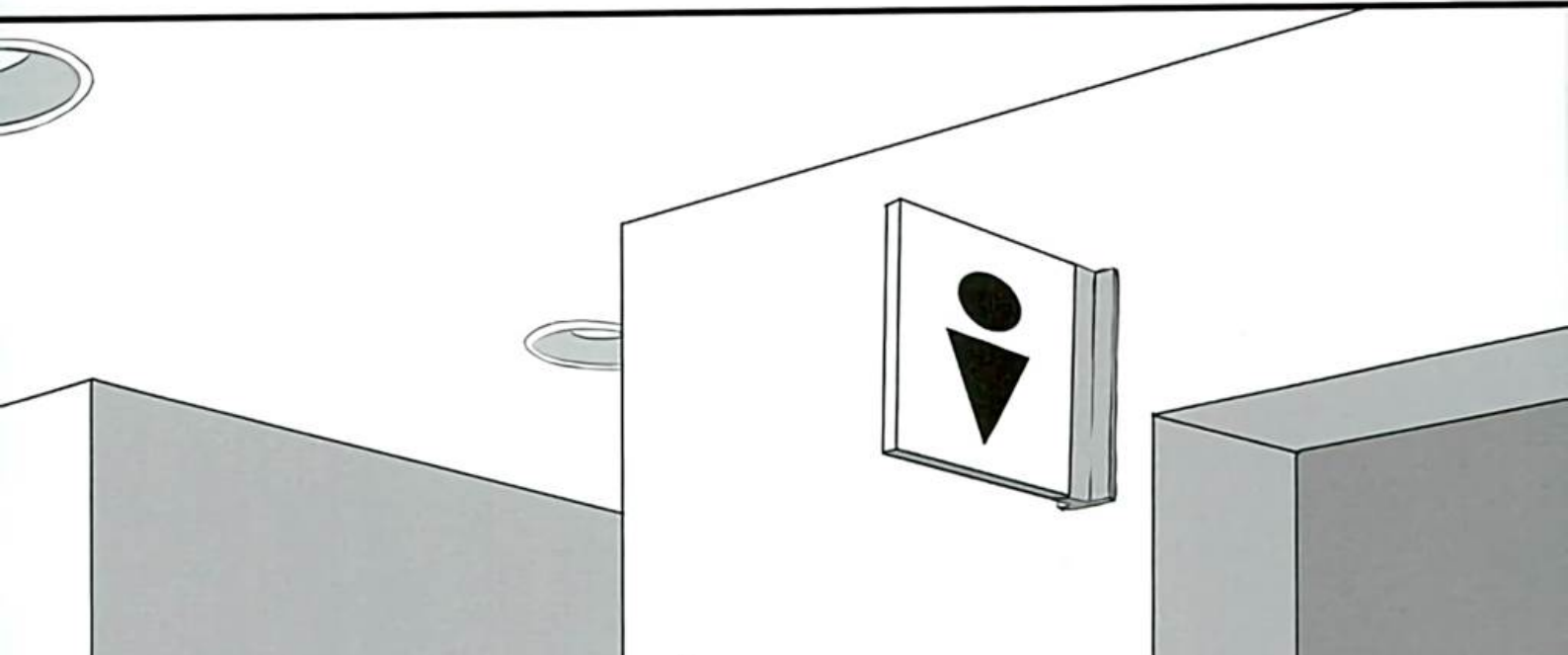


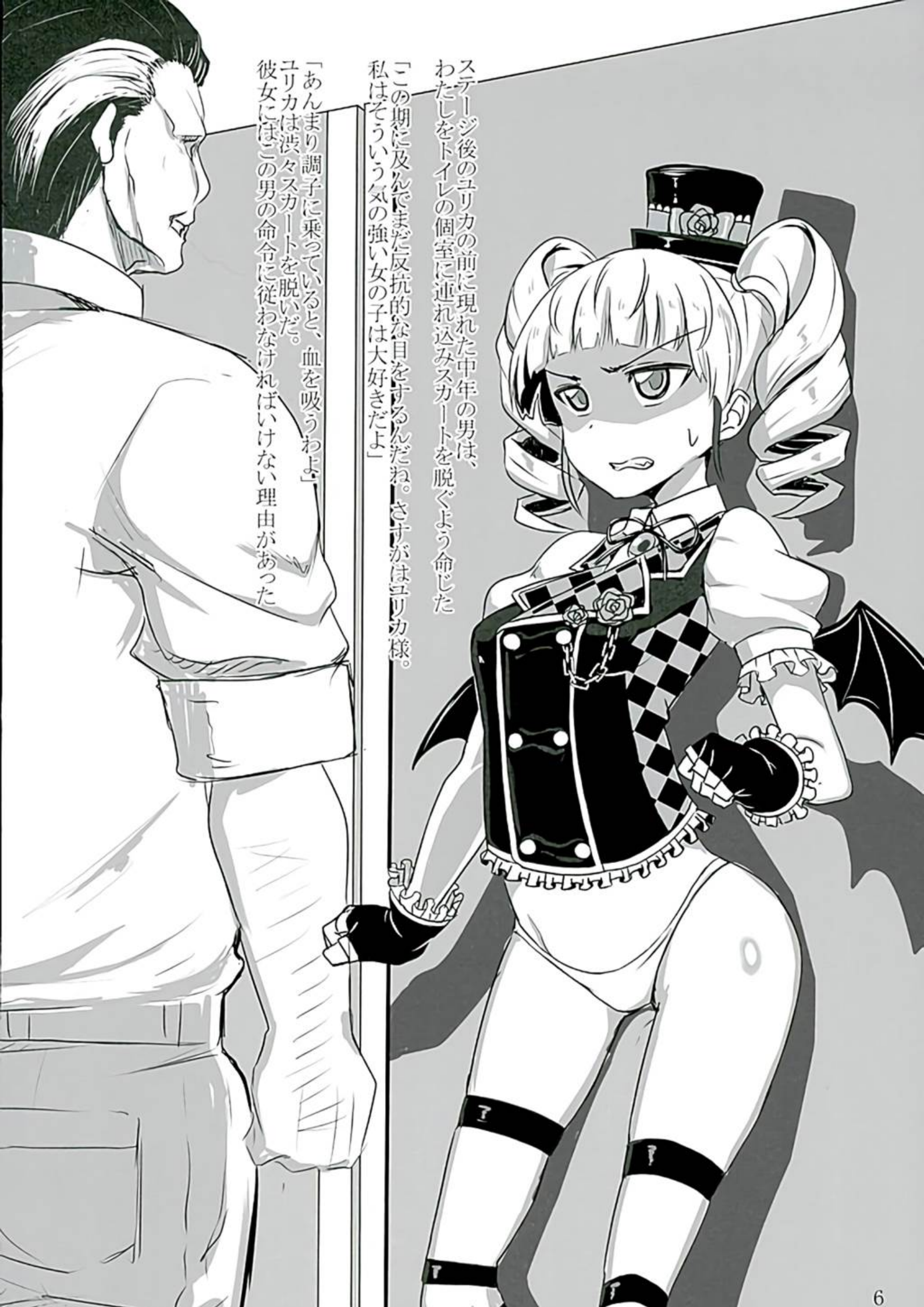
「…良くないことでも無くていい」



「やあ、お疲れさま ユリカ様」

「お疲れさま」





ステージ後のユリカの前に現れた中年の男は、
わたしをトイレの個室に連れ込みスカート脱ぐよう命じた

「この期に及んでまだ反抗的な目をするんだね。さすがはユリカ様。
私はそういう気の強い女の子は大好きだよ」

「あんまり調子に乗っていると、血を吸うわよ。
ユリカは渋々スカート脱いだ。
彼女にはこの男の命令に従わなければいけない理由があった

先日ユリカはアイカツシステムを運営する会社の重役だというこの男に呼び出され、ある動画を見せられた。「この娘に見覚えはないか？」
「蘭！ どうしてこんな」
目隠しがされていたものの、この声は間違いない。その動画に写っていたのはまさしく紫吹蘭その人だった。



突然の脅迫に驚愕と憤怒が湧き上がったが、蘭を思い不本意ながらユリカは承諾したのだった。



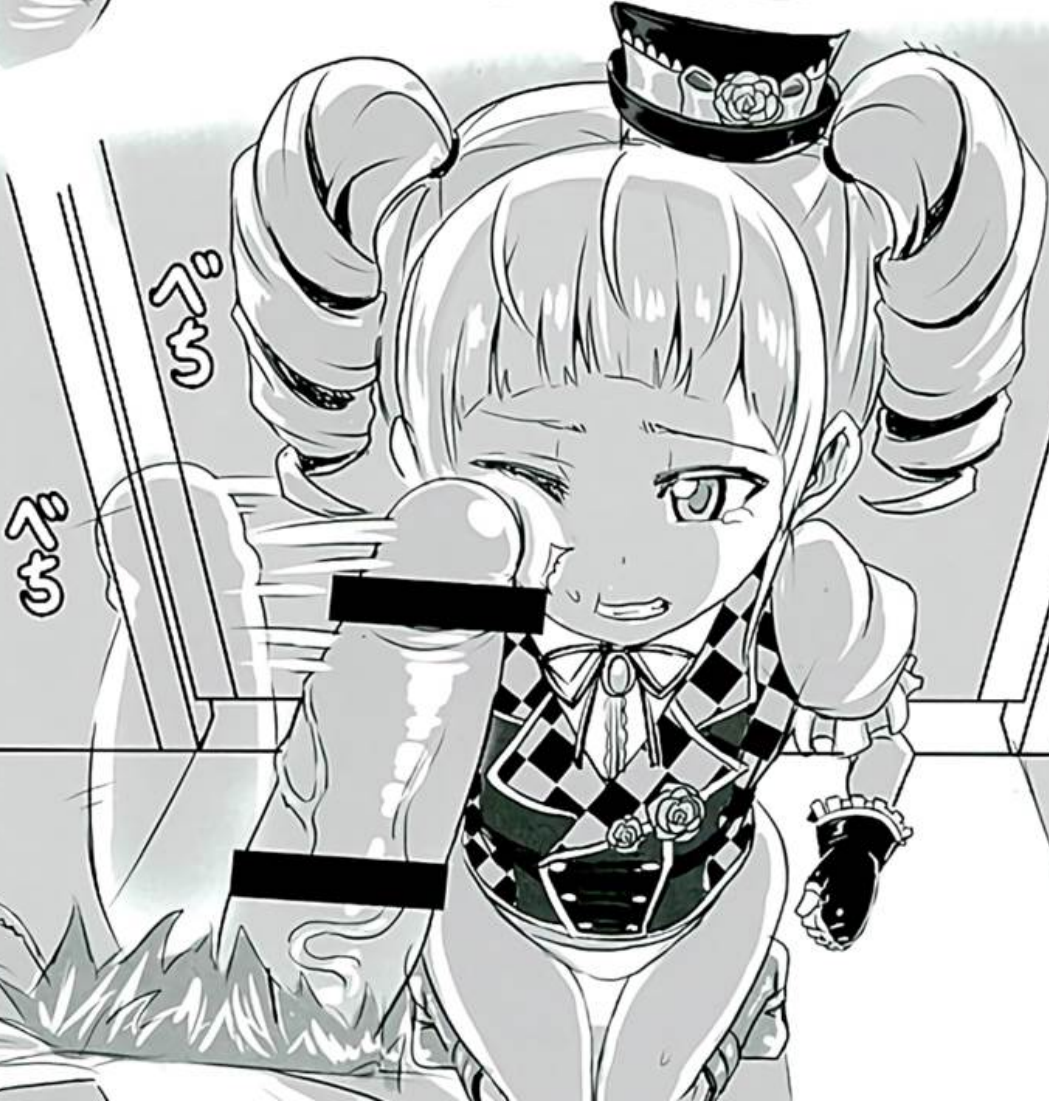
男は動画の出処は語らなかつた。「君はこの娘を大層気にかけているらしいね。この動画を流されたくなければ私の言うことを聞きなさい」



男はユリカに跪く真う促しズボンを脱ぎ、いきり勃つ肉棒をユリカの目の前に放り出した
「まずはコレをしゃぶってくれないか？」
むあつ
「む、むりい…」
むせ返る臭いに思わず悲鳴が漏れる



「…仕方ない。立って下着を脱いでドアに手を着きなさい」
ユリカは頑なに拒絶した。
「い、いやだ」



ふむ、はやくこれに慣れないと君が辛いだけでぞ。んん？
その言うと男は陰茎でユリカの頬を怪く叩いた。

ユリカは男の言う通りに、男に尻を突き出すような格好をした。すると男はユリカの秘部に肉棒を押し付けた。



ぬちっ

ズズ...

「しない」

男は何も付けずにユリカの秘部に割入った

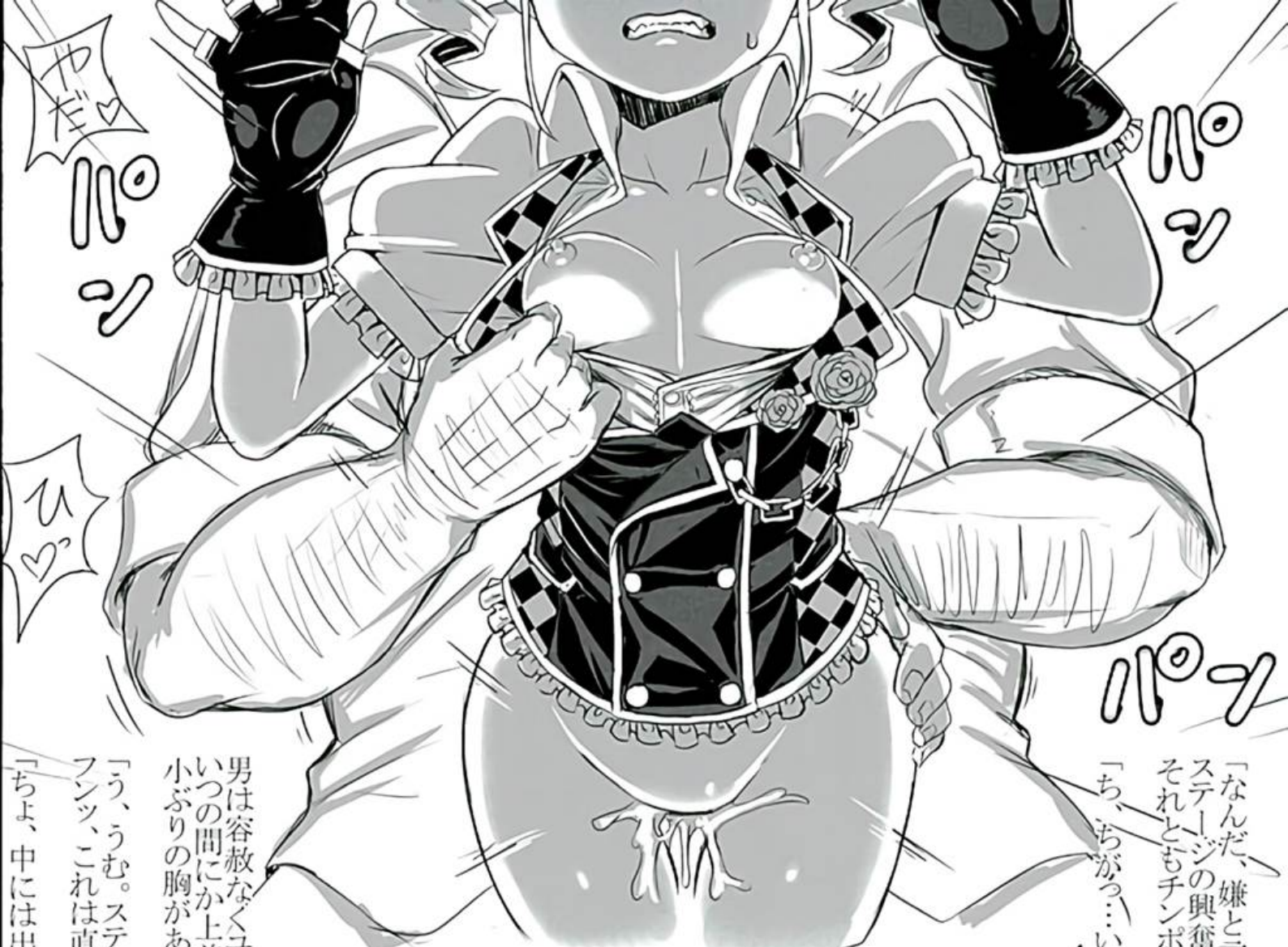
「言うことを聞かない罰だ。前戯もなしに挿入れてやるわ」

「や、ひ、避妊は」

ぷうぷう♡

ユリカの口から嗚咽が漏れ





「なんだ、嫌と言う割にすんなり入ったぞ。ステージの興奮が冷め止まぬせいかな... それともチンポを見て濡らして...」

「ち、ちがっ...いっ!」

男は容赦なくユリカと腰を打ち付ける
いつの間にか上着の胸の部分は大きく開き
小ぶりの胸があらわになつていた

「う、うむ。ステージ衣装のまま犯すのは良いな、
フンツ、これは直ぐに達してしまいそうだ」

「ちよ、中には出さないでよ...」



「あゝ」

「ハッハッハッ」

「う、イクッ」

あゝ

アハハ

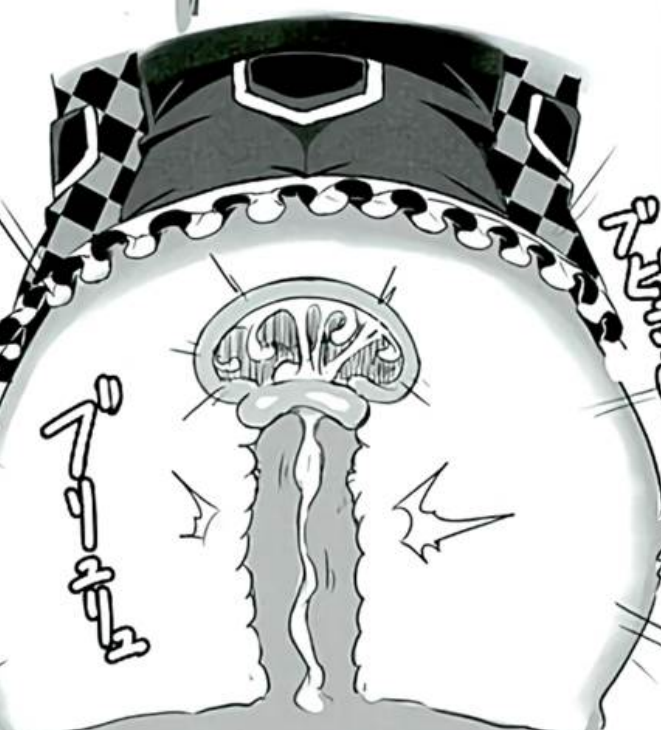
ほっ

ゴクゴク

男は一際強くユリカに腰を打ち肉棒を子宮口に突きたてて精液を放った

「ま、まさか中出ししてないでしようね？ねえ？」

男はユリカを無視し段々縮まっていく腔の感触と中出しの余韻に浸っていた



何十分経過しただろうか
あれから中年の男はユリカの膣内に何度も
中出しし、肉便器のように扱った。
いままで受けたことのない壮絶な
仕打ちにプライドを傷つけられ
茫然自失になりかけるユリカに男は言葉を投げかける。

「年甲斐もなく張り切ってしまったな。
今日はこのくらいにしておこう。次の機会にはワエエくらいでできるよう…
なんだ聞こえてないのか？あの蘭って娘の動画を流してしまうぞ」



「いいぞ、そのぐらい気位が高く
なければこちらもやりがいいからな
男はそう言い放ちトイレを後にした



蘭の名前を聞いたユリカは
生気を取り戻すように男を睨めつけた

数日後、ユリカは再び中年の男に誘われて出しに雇い
言われるがまま、ニーガールの衣装を着た

「ん、この生意気な尻、やはり堪らないな。
触り心地もよし。私に見立て通りだ。可愛いよユリカちゃん」

さわ

さわ



「ほらほら、おじさんのチンポも我慢の限界だ」
男はユリカの腰を引きつけ怒張した
肉棒を布越しの秘部に押し付けると、
ユリカはますます同様した。
「ちよつ、まってそんなイキナリ……」



スワスワ

「え、そ、そんなことも
なくもなくつてよ」
突然の褒め言葉に動揺するユリカ

おま



たろ

…つて、本当にムードもへったくれも、んっ、ないわね！あつ」
ユリカは動揺している間に押し倒され犯されていた

「ユリカちゃん、の腔中凄く気持ちいいからすぐ出る！」
「ちよ、やめて！また腔中に出さないでえ！」





びびる

ズ

ズ

びびる

いなかはい!

また!

「まだまだ行けるぞ」
そう言い男はユリカが気絶するまで犯し続けた

ホ

ゴ

ホ

中年の男とユリカの爛れた関係が続いた数週間後
「ちよつとこれなんなのよ、首に痕が付いたら
ステージに立てなくなるでしょ？」
スク水に着替えさせられた
ユリカの首には首輪と手綱が付けられていた

「今日は少し
手荒にいくよ」

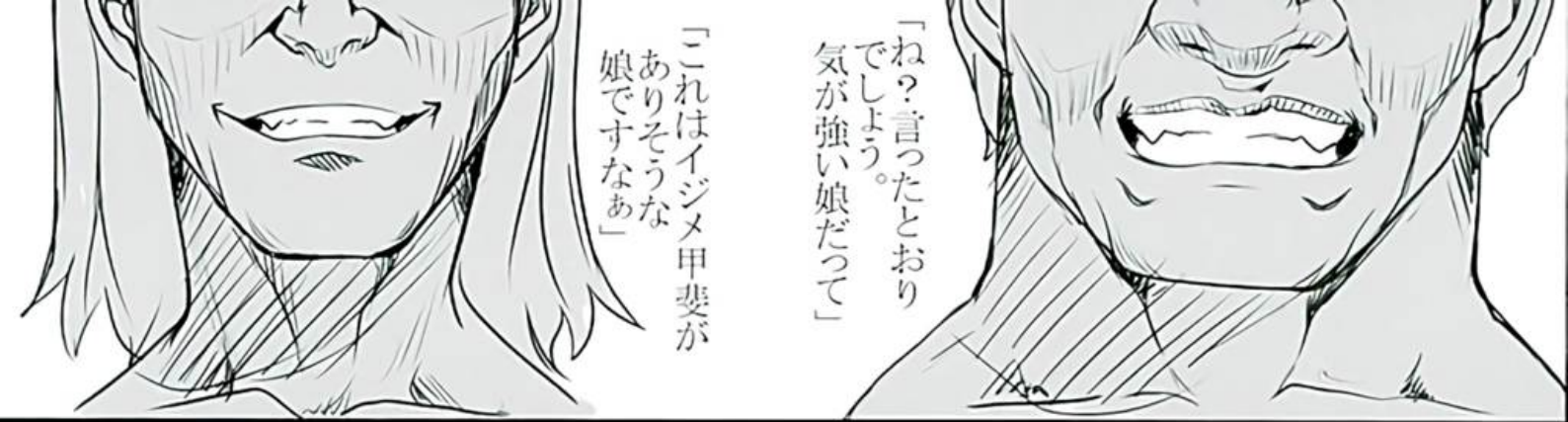
「いつも手荒じゃな…ぐえっ！」



「ユリカちゃんも新しい刺激が欲しいだろう？
あとこれからもう一人と相手をしてもらうよ」

「…一人の女に寄って集って、アンタ達つくづく最低ね」





「ね？言ったとおり
でしょう。
気が強い娘だつて」

「これはイジメ甲斐が
ありそうな
娘ですなあ」



「何回も輪姦しているのに締めつけが変わりませんでしょう」
「そうですね流石人気アイドルだけあって下の方も素質がありますな」
「デంత達…人をなんだと、ああん、思ってるの…はあっ」

「さて、口の方を使わせていただきますね」



「最近イラマチオを覚えさせたんですよ。ただまだ慣れなくてですわね」
「あー、でも八重歯があたっていい感じに……うっ出る」



「お若いですなあ」
「はは、お互い様で……ほら、舌を出してみなさい」

んっ

ぬなっ

おエッ

ん!!

ん!!

んっ



あーもう出るにユリカちぎらん出すよ!

た〜ん

は〜ん

もうお願い
だかから出さな

やだ
だ♡



「ひ、ま、また出てる」
「熱いの染み込んでるうう」

は〜ん

は〜ん

は〜ん

は〜ん

は〜ん

♡やっ



「ふう、また出してしまった」

「すごいイキっぷりでしたねえ」

「はは、もうこれで打ち止めですよ」

「では最後に私が…」

「もう、いやあ…」

「おや、これは？」

「やつとですわねえ……」



「これでいいのかね？」

「うん。とってもいい絵。キヤワワ♥」

「この後に君がユリカちゃんを
慰めて自分のモノに…
つていつものパターンかい？」
「ウフフ。いつもオジサマには
感謝してるわ★」

「しかしユリカちゃんも気がつかないだろうね。蘭ちゃん動画がまさか、君の調教動画だったとは。どうせオジサンたちに好きな女の子を抱かせるのも調教の一環なんだろう？」

「もちろん♪」

「女同士の憧れや友情、愛情を裏から操り百合ハーレムを築こうとしている君には恐れ入るよ。まあそのおかげで私たちもいい思いをしているわけだが」

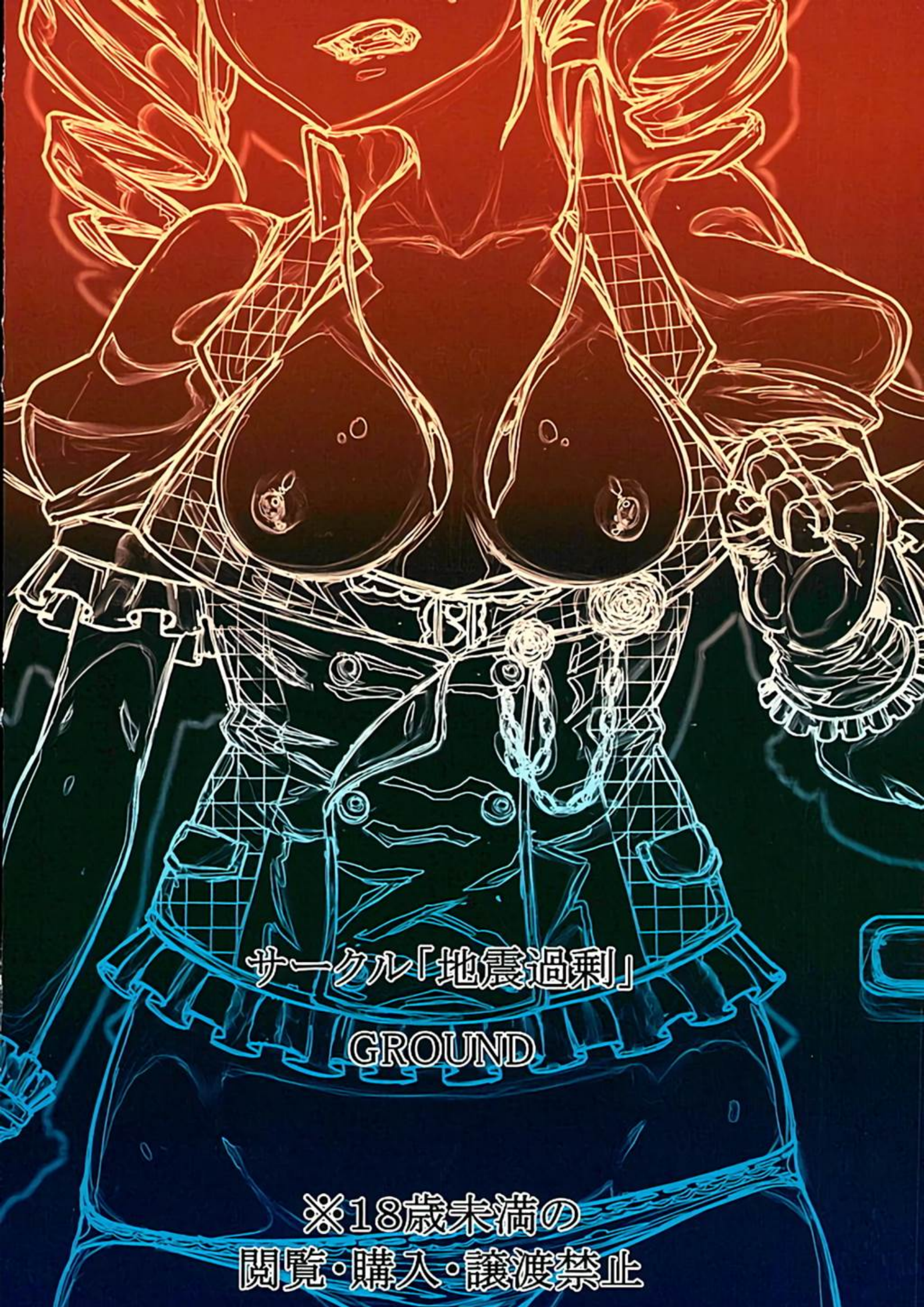
「まあ。オジサマだったらお上手♠」



「ははは。さて、次は誰だったかな…
ほう、氷上スミレちゃんか」

「あの娘からとつてもいい女の子の
においがするの。これからもよろしく
お願いね。オジサマ」





サークル「地震過剰」

GROUND

※18歳未満の
閲覧・購入・譲渡禁止